468 褐色細胞腫における ^{131}I－MIBGシンチグラフィーの有用性－CTとの対比－

小泉　満、遠藤啓吾、阪原晴海、中島鉄夫、
太田仁八、奥村亮介、中野善久、鳥塚莞爾
（京大　放核）、中尾一和（京大　2内）

^{131}I－MIBGシンチグラフィーが褐色細胞腫部位診断に用いられているが、今回我々は、その有用性を確認すべく、従来より部位診断の方法として用いらているCTとの対比検討を行なった。検討した症例は、褐色細胞腫疑診例25例で、15例29病変が手術及び剖検等にて確診され、うち、2例2病変が副腎外のものであった。10例は、他目的の手術及び、カテコールアミンの再測定等にて、褐色細胞腫例でないことが確認された。

副腎病変については、検出率は、CT88%、^{131}I－MIBG71%と、CTが優れていた。副腎外病変は、CT50%、^{131}I－MIBG 100%と^{131}I－MIBGが優れていた。副腎、副腎外病変を合わせると、CT84%、^{131}I－MIBG74%の検出率であった。また、偽陽性例は、なかった。褐色細胞腫の部位診断では、CTが検出率に於いて若干すぐれているが、副腎外病変で、^{131}I－MIBGではじめて検出された例もあり、その特異性を考えると、^{131}I－MIBGの有用性が、さらに確認された。

469 ^{131}I-Adosterolによる副腎皮質癌の描出

丸岡　伸，中村　護（東北大　放）

従来^{131}I標識コレステロールによる副腎シンチグラフィの副腎疾患における有用性が報告されているが、副腎皮質癌を描出しえたという報告は非常に少ない。われわれは1796年以降、^{131}I-Adosterolによる副腎シンチグラフィが副腎皮質癌の術前診断に有用であつた4症例を経験したので報告する。4例中3例はCushing症候群型副腎癌であり、残りの1例は副腎性器症候群型副腎癌である。Cushing症候群型副腎癌は全例女性で年令42－58才、手術による摘出腫瘍の大きさは80×68×62㎜・220g－130×105×90㎜・800gであり、副腎性器症候群型副腎癌の1例は2才女児で、手術による摘出腫瘍の大きさは53×42×30㎜・33gであつた。スキャンは^{131}I-Adosterolを400－500μCi（2才児では150μCi）静注投与し、主に8日後に行なつた。Cushing症候群型副腎癌では3例共癌腫に一致して集積を認め、対側の副腎は描出されなかつた。また集積の程度は2例では弱～中程度であつたが、1例では腺腫にみられると同程度の強い集積であつた。副腎性器症候群型副腎癌の1例では癌腫への強い集積を認めると共に対側副腎にも弱い集積を認めた。

470 SPECTによる副腎I－131－Adosterol摂取率測定に関する検討（第2報）－スタンダード法に関する臨床的評価－

石村順治、末廣美津子、立花敬三、尾上公一、
浜田一男、福地　稔　（兵庫医大　RI）

我々は回帰直線法によりSPECTを用いた副腎I－131－Adosterol摂取率（% Uptake）を求め、その臨床的有用性を本総会で報告した。この回帰直線法は再現性に若干問題があり、そこで、この問題を解決するためスタンダード法につき検討したので報告する。　方法は投与量の1%をスタンダードとしbody phantom内副腎部に封入し、患者検査終了後に同一条件下でSPECTを施行した。得られたdataを基に患者副腎部のSPECT値を求め、両者を徐算して% Uptakeとした。　結果は、最終臨床診断で副腎皮質機能が正常であった22例で% Uptakeは右副腎で0.60±0.27%、左副腎で0.53±0.22%との成績が得られた。これに対し、副腎皮質機能亢進症6例で患側副腎の% Uptakeは2.07±1.45%副腎皮質機能低下症6例では、いずれも副腎imageが得られず、% Uptakeは0%であった。　以上の成績から、スタンダード法によるSPECTを利用した% Uptakeの測定は左右別々に副腎皮質機能状態を把握できるため臨床的に有用との成績を得た。

471 副腎シンチグラフィー上のpseudo－functioning adrenocortical adenoma

峯　博子，松本誠一，金田浩一（癌研　放）
鷲塚　誠（同　泌尿），梅原　功，奥山武雄
（東医歯大　放），東　四雄（同　泌尿）

臨床的に副腎皮質ホルモンの異常を示さないにもかかわらず，副腎皮質シンチで著明な集積を認めた副腎皮質腺腫の2例を経験した。

1例は，71歳女性で，アミラーゼ軽度上昇のため腹部CTを施行，偶然左副腎腫瘍が発見された。Se-75-Scintadrenによる副腎シンチでは，左副腎に強い集積を認め，病理組織学的には，adrenocortical adenomaの診断であった。摘出した左副腎の，腫瘍部分と非腫瘍部分の各種ステロイド組織内濃度を比較すると，Cholesterol，Pregnenolone，Progesterone，17α－hydroxyprogesteroneは腫瘍部分で高濃度，Aldosteroneは低濃度，Cortisolは同程度であった。

他の1例は，63歳男性で，糖尿病の精査中，CTで偶然右副腎腫瘍が発見された。副腎シンチでは，右副腎に強い集積が認められた。

腫瘍内でのステロイド合成経路の途中が障害されているため，中間産物の上昇があり，臨床的に副腎皮質ホルモンの異常がないにもかかわらず，副腎シンチのみかけ上hyperfunctionを示したと考えられた。

Presented by Medical*Online